2019年9月22日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所 主日礼拝 NO.1086
聖　書　　創世記 35:22b～26／ルカによる福音書 20:36～38
説　教　『アブラハム、イサク、ヤコブの神に』　　長崎 哲夫　牧師

アブラハムの子イサクの生涯の事業は、両親をヘブロンのマクベラの洞穴に葬って(25:9)父の意思を継承し、ペリシテ領ゲラル地方を麦の一大穀倉地帯(26:12)とすると共にヘブロンの南西 43 kmのベエル・シェバにアブラハムと共に掘った命の源である「七つの井戸」(26:15)、アブラハムがアビメレクとの間の「誓いの井戸」とも言われた井戸を砂漠に復活させたことにある(26:23)。

一方美しい妻リベカを父アブラハムの再三犯したと同様ペリシテ王アビメレクに「わたしの妹」(26:7)等と言いその場を逃れようとしたり、その晩年二人の息子エサウとヤコブを取り違え、妻リベカは愛した次男ヤコブに長子の特権と祝福を盗ませ(27:18)、ヤコブを先祖アブラハムの父テラの地でリベカの故郷ハランへ逃した。

聖書は人の悪意、嘘、愚かさを攻めない。神の人への介入は、人のそれらのど真ん中で神の栄光、神の義を示すからだ。それ故、神は母リベカが次男ヤコブをもって長子エサウを騙すのを、また老いて痴呆の夫イサクを窮地に貶めるのも黙って見ている。
この家族的悲劇の中でヤコブはベエル・シェバを逃れてルズに着いた時、神はヤコブに与えるものの10分の1を献げる請願を立てさせ(28:22)、一夜の枕石を記念碑として先端に油注ぎ、其処をベテル(神の家)と呼び神の栄光を讃えさせた。

ヤコブの旅はハランの母リベカの兄ラバンの家だったが、ヤコブは偶然にもその地の井戸端でラバンの娘、後に本妻となるラケルと出会う。
砂漠に水の湧く所、井戸は人も家畜も集めて出会いの場とし(29:1)、祝福に与らせる。
さてラバンは長女レアと次女ラケルがあり、甥ヤコブを欺いてもレアをおいて次女ラケルを結婚させなかった。それによる混乱は結果的にヤコブはレアの召使ジルバとラケルの召使ビルハを加え計四人の女性にやがてイスラエル12部族の祖となる息子たちと一人の娘を生ませて父となり(30:22)ラバンの手を逃れ、騙して出奔した兄エサウのもと、神の故郷へ帰った。

途中、ヤボクの渡しで何者かと格闘し、夜明けに「お前の名はヤコブでなく、イスラエル」と言われる。神の人と闘って勝ったからである(32:29)。
更に体弱く難産で死んだ妻ラケルがその子をベンオニ(私の苦しみの子)としたのをベニヤミン(幸いの子)とし、悲しんでエフラタ今のベツレヘムに向かう道の傍らにラケルを葬った。
其処は何よりも後にエルサレムを定めたダビデ生誕の聖地だ(上サム16:1)。

ヤコブの兄エサウのもとに辿り着くまでの苦渋は深刻だったが、彼は兄弟再会の地シケムに祭壇を建てて其処を「エル・エロイ・イスラエル」(イスラエルの神なる神)と呼んで主を讃えた(33:18)。
思えば伯父ラバンの娘たちを手放すことの苦渋と過酷さは一通りではなかったし(31:54)、兄エサウの祝福を盗んだヤコブの心の痛みは人の想像を絶した。だが、思いのほかエサウはひれ伏す弟に寛大だった(33:12)。

神は遂にカナン地方即ちベテルにヤコブを導き、一族が身につけていた外国の神々と耳飾りを取りはずし、身を清め、衣服を着替えさせて、もう一度石の柱に葡萄酒と油を注がせてベテルで神を讃えさせた（ホセア12)。
かくしてヤコブはイエス・キリストの福音への道を開いた。

(長崎哲夫牧師の説教要約)